

## スイッチ

中学校で卓球をやっていた絵里は、城南高校へ進学した。城南高校は、毎年インターハイに出場する強豪校で、顧問の坂先生は県内でも有数の指導者だ。絵里がこの高校を志望したのも、坂先生に指導してもらったためだ。予想以上の練習の厳しさに負け、入部してすぐに辞めてしまった者もいたが、多くの部員たちは、先生の言う通りにやっていたら、確実に強くなるという手応えを感じていた。

絵里が二年生になった六月上旬の地区大会で、城南高校は団体優勝した。絵里も、ただ一人の二年生のレギュラーとして、その一翼を担った。六月下旬の県大会に向けて、部員一同は以前にも増して練習に熱が入り、体育館には連日遅くまで明かりがついている。部員たちは県大会に勝ってインターハイの切符を手に入れようと燃え上がっていた。

ところが、県大会を三日後に控えて、練習に入ろうとした時だった。副顧問が体育館に現れて、みんなを集めた。

「実は、坂先生が緊急入院されることになった。高熱が出ているということだ。とにかくキャプテンを中心に、最後の仕上げをして県大会に臨んで欲しいという連絡があった。」

部員たちから、悲鳴ともつかない声が上がった。

「高熱って……大丈夫なんですか。」

「坂先生はいつ戻って来られるんですか。」

部員たちは矢継ぎ早に質問を浴びせかけたが、検査をしてみないと何も分からない状況ということだった。

しばらくの沈黙の後、キャプテンが立ち上がった。

「みんな、ともかくいつも通りに練習をしよう。」

その言葉に返事をし、絵里も卓球台に向かったが、なぜかミスばかりだった。

県大会が始まった。城南高校はシード校なので、観客席から一回戦の様子を見てみると、どの学校のベンチにも顔見知りの監督が座っている。絵里にとって、坂先生がいない試合は初めてだ。

試合が進み、二回戦、三回戦と順当に勝っていったが、準決勝で格下と思っていた学校に負けてしまった。「あの優勝候補の城南が負けてしまった。」と、体育館のざわめきはしばらく止まらなかった。相手校はまるで優勝でもしたかのような喜びようだった。

その日の帰り、部員たちは病院に寄った。五階の病室までのエレベーターの中でも、全員黙りこくっていた。恐る恐るドアをノックして入ると、先生は横になっていた。

「先生……、すみません。準決勝で負けました。」

キャプテンがそう言うと、辛そうにゆっくりと体を起こした坂先生は、

「そうか……。いや、一番大切な時にやれなかったな。すまない。三年生にもっと長くプレーさせてやりたかったのに。」

と、優しく声を掛けた。その言葉を聞いた三年生から嗚咽おえっがもれた。

「いいから、泣くな。」

と言いながら、坂先生の目にも涙が光っていた。

三年生が引退した後は、絵里がキャプテンになった。普通、三年生の引退は八月なのだが、今年はイン

ターハイに出ないので、六月下旬に新キャプテン選出ということになってしまったのだ。絵里にとって、次のキャプテンは自分かなという予感があったが、いざ指名されてみると急にその重圧を感じ、不安が募ってきた。

チームをまとめていけるんだろうか。チームに動揺が走っているこの時に。

キャプテンになった後、期末試験が迫っているのに、絵里はふと気付くと卓球部のことばかり考えていた。勉強もそこそこに、自分たちが「坂ノート」と呼んでいる部活動日誌から、昨年の新チーム発足時の練習メニューを探し、書き出してみた。それは驚くほど徹底的に基礎の見直しを図るためのメニューだった。絵里は改めて坂先生の思いを感じた。

試験が終わり、七月には一年生、二年生だけの練習が始まった。初めは緊張感もあった。しかし、「坂ノート」のメニュー通りにやっているのに、七月も末になると、一年生から不満が出始めた。

「キャプテン、ずっとこのメニューばかりなんですか。」

「基礎が大切なのは分かりますけど……。」

そう訴えてくる一年生の声に、絵里はそれを振り切るように、

「いいの。これが城南の練習なんだから。」

と強気で答えながらも、内心どうすれば良いのか分からなくなってきた。

そんな絵里を見て、由美がそばに寄ってきた。

「ねえ、絵里。このままでは行き詰まるよね。明日、二人で坂先生のお見舞いに行こうよ。練習がうまくいってないなんて言えないけど、先生の顔を見れば元気が出るかも。」

由美の言う通りかもしれないと絵里は思った。

翌日、練習の後、二人は病院に寄った。病室のドアを開けると、そこにはライバル校の監督、田原先生が

見舞いに来ていた。練習試合や合同合宿で、絵里も由美もよく知っている先生だ。先生たちは、高校時代から卓球選手としてのライバルだったと先輩に聞いたことがある。二人は新チームの様子を先生に報告したが、心配させてはいけなないと思い、本当のことは言えなかった。関係のないことばかり話して時間がどんどん過ぎていった。

「あ、こんな時間。もう帰らないと。先生、お大事に……。」  
そう言って帰ろうとする二人の顔を、坂先生がのぞき込んだ。

「二人とも、何か聞いてもらいたいことがあったんじゃないのか。」

絵里がドキドキしながら口ごもっている、横から田原先生がニヤツとして言った。

「坂先生を頼って来たんだらう。今、君たちは試されているんだよ。」

絵里は田原先生の言葉をどう受けとめてよいかわからず、坂先生の方を見た。先生もうなずいている。

「あの……先生……お大事にしてください。」

病室を出ようとした絵里と由美の後ろから、もう一度田原先生の声が飛んできた。

「君たち、試されているんだぞ。」

廊下に出た二人は、夕食を運ぶワゴンとすれ違った。絵里は、田原先生の「試されているんだぞ。」という言葉が頭から離れなかった。黙ったまま二人は病院の廊下を歩いた。玄関を出たところで絵里は突然立ち止まった。

「ねえ由美、明日から私たち、スイッチ切り替えよう！」

二人が振り返ると、病院の五階の窓が、夕日に赤く燃えていた。

